4　妻木新山地区の発掘調査報告

－妻木晩田遺跡第18次発掘調査（内容確認調査）－

はじめに

妻木晩田遺跡第18次発掘調査は、妻木晩田遺跡の全体像の把握を目的とする第Ⅰ期内容確認調査の5年次に相当する。妻木新山地区を対象とする内容確認調査では、初年度となる。

現地での調査期間は、平成18年5月15日から10月12日である。

なお、妻木新山地区の調査区は、第1次発掘調査時に、1S区、1N区、2区、3区、4区が設定されている。

1　調査の目的

妻木晩田遺跡では、これまでの調査によって、丘陵の平坦地から縁辺部にかけて集落遺構が分布することが明らかにされているが、本地区では丘陵縁辺部に未調査の範囲が広く残されており、遺構の詳細な状況が明らかにされているとは言い難い。

そこで今回は、本地区の丘陵縁辺部における遺構の分布を把握することを目的とし調査を行うこととした。

調査対象地のうち、1S区南部は第1次発掘調査時に密な遺構分布状況が確認されている地区である。このことから、同様の分布が予想される南端部について、丘陵縁辺部の遺構の分布状況を確認するためにトレンチを設定することとした。また、2区南東部では、第1次発掘調査において確認された竪穴住居跡の分布について南緩斜面への広がりを確認すること、斜面地に分布する遺構の内容を把握することを目的としてトレンチを設定することとした。

事前の聞き取りによると、調査地周辺は、旧西部農業高校（現 県立米子白鳳高校）の演習林（果樹園）として利用していたようである。分布調査によって2区および1S区南斜面の標高90m～100m付近で階段状をなす平坦面が東西方向にのびているのが確認されており[1]、当時の植林に伴う作業道の可能性が指摘されている。本調査の対象地においても、標高94～98m付近に緩やかに傾斜変化した段状の地形が認められたことから、トレンチでこうした地形の状況も確認することとした。

本調査で設定したトレンチは、トレンチ1、トレンチ2、トレンチ3（以下、T1、T2、T3と称する。）の3本であり、調査総面積は199㎡である。なお本節では、竪穴住居跡にはSI、土坑にはSK、溝にはSD、段状遺構にはSSの略号を用いた。また、検出にとどめたため性格を確定できない遺構については、今次調査固有の遺構名S1、S2を付した。

2　T1の調査（第8・9図、写真12～15）

妻木新山地区2区南部は丘陵上部縁辺に未調査地が広く残されている。このうち南東部平坦地では、竪穴住居跡の密度が低く、弥生時代後期中葉（Ⅴ－2）のSI38のみが検出されていた。T1は、このSI38から南方向に広がる遺構の状況を確認することを目的に設定したトレンチである。

設定したトレンチの長さは29m、幅は丘陵の肩部で3m、急斜面地で2mである。その後、検出した竪穴住居跡の平面形を確認するためトレンチの一部を東側へ拡張した。

調査の結果、T1では、丘陵肩部で竪穴住居跡、竪穴住居跡または段状遺構、溝状遺構を検出した。また、急斜面地では、土坑やピット、溝状遺構を検出した他、落とし穴を確認した。遺構の分布について、丘陵肩部の密度が高いことが分かった。

（1）層序

表土Ⅰ層の下には、Ⅱ層（灰黄褐色土）が堆積している。Ⅱ層は肩部～斜面上方で厚さ約20㎝，斜面下方では約6㎝程度であり、トレンチ全体に堆積している。さらに下層にはⅢ層（にぶい黄褐色土）およびⅤ層（褐色土）、Ⅲ層下にはⅣ層（褐色土）が堆積している。

遺構検出面はⅡ層下面である。

（2）遺構

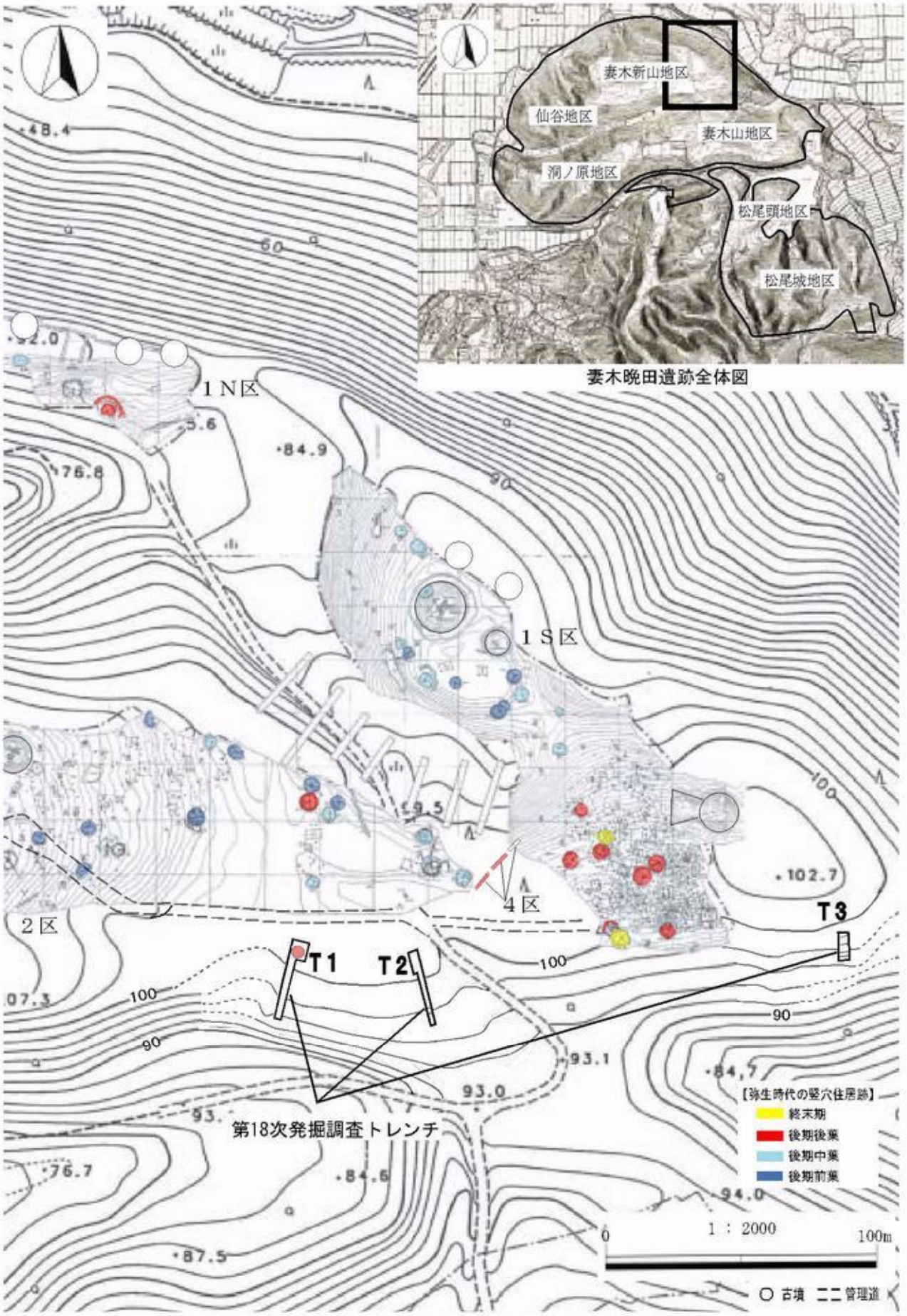
竪穴住居跡

SI89（第10図、巻頭図版2－1、写真16）

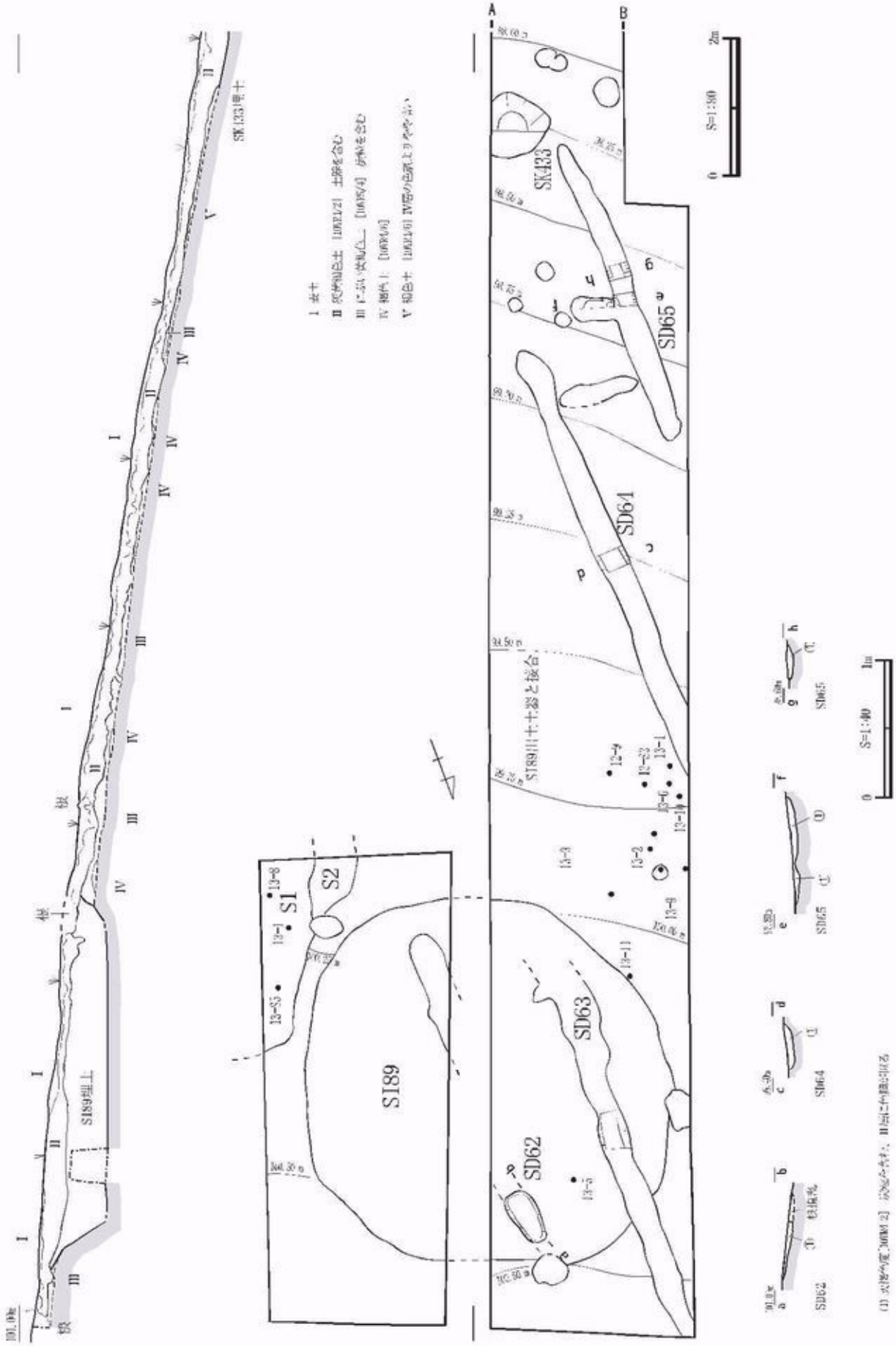
丘陵の肩部、標高100.2mに位置する弥生時代後期後葉（Ⅴ－3）の竪穴住居跡である。SI38からは南に約20m離れている。検出した平面形は直径5.2mの円形、検出面からの深さは最も深い部分で約70㎝である。推定床面積は13㎡である。周辺に周堤の痕跡は認められなかった。

サブトレンチを設定した結果、周壁溝およびピットを確認した。トレンチ調査にとどめたため、主柱穴の数と配置は不明である。

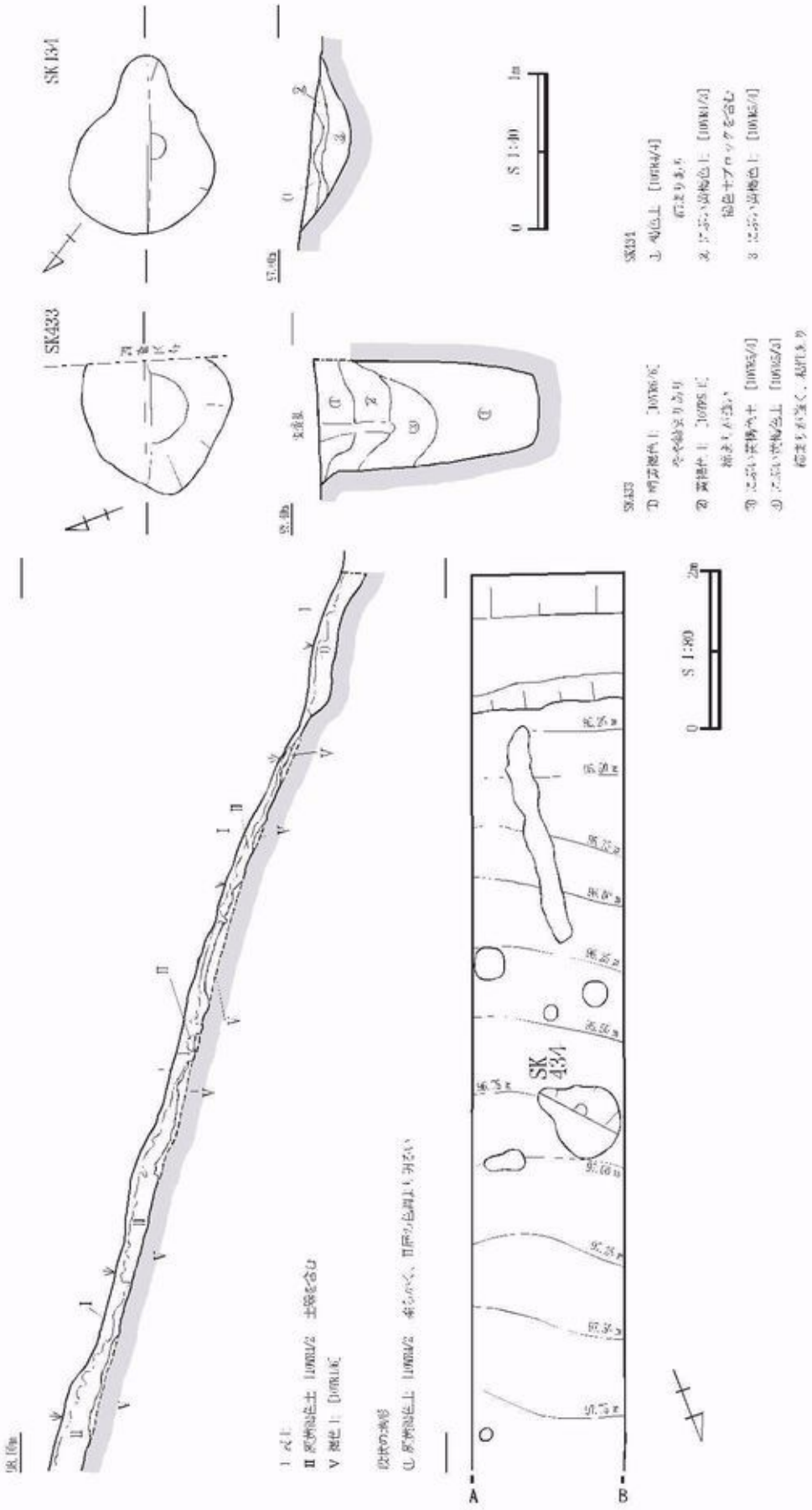
床面上に堆積する④～⑬層は地山によく似た土質であ



第7図　18MNトレンチ位置図



第8図　18MNトレンチ1①



第9図　18MNトレンチ1②

る。これらを覆うように薄く広がる③層（黒褐色土）は、色調から腐植土ではないかと考える。③層上には②層（暗褐色土）が堆積している。最上層は①層（黒褐色土）である。

遺物は、東側に設定したサブトレンチで床面直上に6個体分の大ぶりな土器片が重なるような状態で出土した（第11図、巻頭図版2－2、写真17）。器種と個数は、壺1個体、甕4個体、器台1個体であり（第12図－1～6、写真44～49）、これらの土器は弥生時代後期後葉（Ⅴ－3）の特徴をもっている。妻木晩田遺跡における遺物の出土状況は大きく4つに分類できるが（馬路 2006）、本例は住居廃絶時に遺棄されたものと考えられることから、類型Ⅲ類に分類される。妻木新山地区の竪穴住居跡でこのような遺物の出土状況が確認されたのは初めてである。妻木晩田遺跡全体でも時期が明確な竪穴住居跡では8例目となる（第5表）。

その他、埋土中からは弥生時代後期前葉～後葉（Ⅴ－1～3）の特徴をもつ土器が出土している（第12図－7～20、写真44）。石器は石錘、磨石、くぼみ石、台石が各1点ずつ出土している（第13図－S1、S4～S6、写真53、55）。このうち石錘は、短軸に2条、長軸に1条の溝が彫られている。溝の断面は「V」字状を呈しており、鉄器の使用が想定される[2]。妻木晩田遺跡出土の石錘では23例目となり、本資料のように縦横に施溝するものとしては9例目である（第6表）。重さは21.6ｇ、石材は軟質な蛇紋岩質凝灰岩を利用している。施溝前に丁寧に全体の形を紡錘形に整えており、縦方向に幅約6㎜の加工痕が見られる。

S1・S2（第8図）

トレンチ拡張時にSI89から東に約30㎝離れた位置で検出した遺構である。検出面での土色の違いから、S1とS2の2つの遺構を想定しているが、単一の遺構の可能性もある。トレンチの東端での確認にとどめたために全体形は不明であるが、形状および規模から竪穴住居跡または段状遺構と推定される。遺物は、S1の埋土上面から弥生時代後期前葉～中葉（Ⅴ－1～2）の特徴をもつ土器および敲石が出土している（第13図－1、S2、写真50、53）。

土坑

SK433（第9図、写真22）

斜面の変換点付近、標高98.2ｍにある。検出時の平面形は直径92㎝の円形、深さは1.4ｍである。底部にピットは確認していないが、形状および埋土の色調から落とし穴と判断した。遺物は出土していない。

SK434（第9図、写真23）

標高96.7ｍの急斜面地に位置する。検出時の平面形は歪な楕円形で、長径1.1ｍ、短径90㎝、深さ23㎝である。遺物は出土していない。

溝状遺構

SD62～SD65（第8図、写真24～26）

丘陵平坦部から肩部にかけて、南北方向に平行してのびる4本の溝である。SD62とSD63、SD64とSD65の距離は約1.2ｍで並行している。サブトレンチで横断面を確認した結果、幅30㎝、検出面からの深さは5㎝であった。SD62およびSD63がSI89の埋土を掘り込んでいることから、SI89埋没後に掘削された遺構である。埋土の色調は灰黄褐色土で、Ⅱ層の色調によく似ている。遺物は出土していない。

その他の遺構

ピット（第8、9図）

検出したピットの多くは、標高98～98.7ｍおよび96.2～97ｍ付近に集中している。埋土の色調は全て褐色である。検出にとどめたため、時期は不明である。

段状の地形（第9図）

T1の南端部にあり、検出した範囲は東西2ｍ、南北1.6ｍである。東西にのびる幅80㎝の平坦面が造られている。埋土はしまりの弱い土質で、近代の遺物を含んでいた。

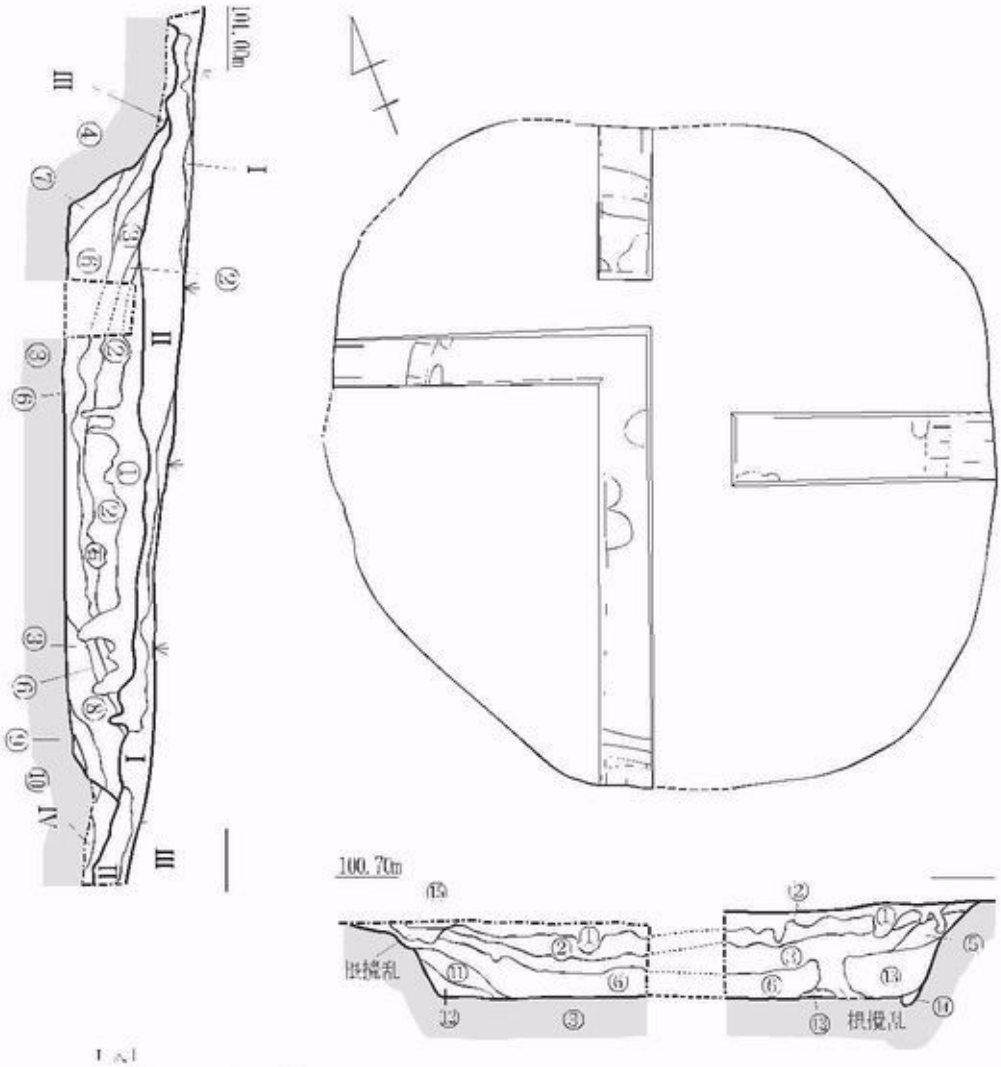
（3）遺構外出土の遺物

前述した遺構出土の遺物の他、Ⅱ層から弥生時代後期前葉～後葉（Ⅴ－1～3）の特徴をもつ土器片および磨石が出土している（第13図－2～13、S3、写真50、53）。

3　T2の調査（第14図、写真27～30）

2区南東部において、丘陵の肩部から谷に向かって下る緩斜面地の遺構の分布状況を確認するために設定した。T1からは東に50ｍの位置にある。トレンチの長さは28ｍ、幅は丘陵の肩部で3ｍ、斜面地では2ｍに設定した。

調査の結果、T2では斜面中腹で段状遺構を確認し、



Ⅰ 表土

Ⅱ 灰黄褐色土 [10YR6/2] 十器を含む

Ⅲ にぶい黄褐色土 [10YR5/4] 炭粒を含む

Ⅳ 褐色土 [10YR4/6]

0 S=1:60 2m

SI89

① 黒褐色土 [7.5YR3/1]

② 暗褐色土 [10YR3/3] 炭粒、黄褐色ブロックを含む

③ 黒褐色土 [7.5YR3/2]

④ 暗褐色土 [7.5YR3/1] 炭粒を含む

⑤ 褐色土 [7.5YR4/3] 炭粒、赤色粒を含む、⑥層に似る

⑥ にぶい黄褐色土 [10YR5/3] 炭粒を含む

⑦ 褐色土 [7.5YR4/4] 炭粒を含む、締まる

⑧ 褐色土 [7.5YR4/4] 炭粒を含む、締まる

⑨ にぶい黄褐色土 [7.5YR5/4] 炭粒を含む、地山（Ⅳ層）の色調よりやや暗い

⑩ 褐色土 [10YR4/6] 地山（Ⅳ層）の色調よりやや暗い

⑪ 褐色土 [7.5YR4/6] 炭粒、赤色粒を含む、⑤層に似る

⑫ 暗褐色土 [7.5YR3/3] 炭粒、焼土粒を含む

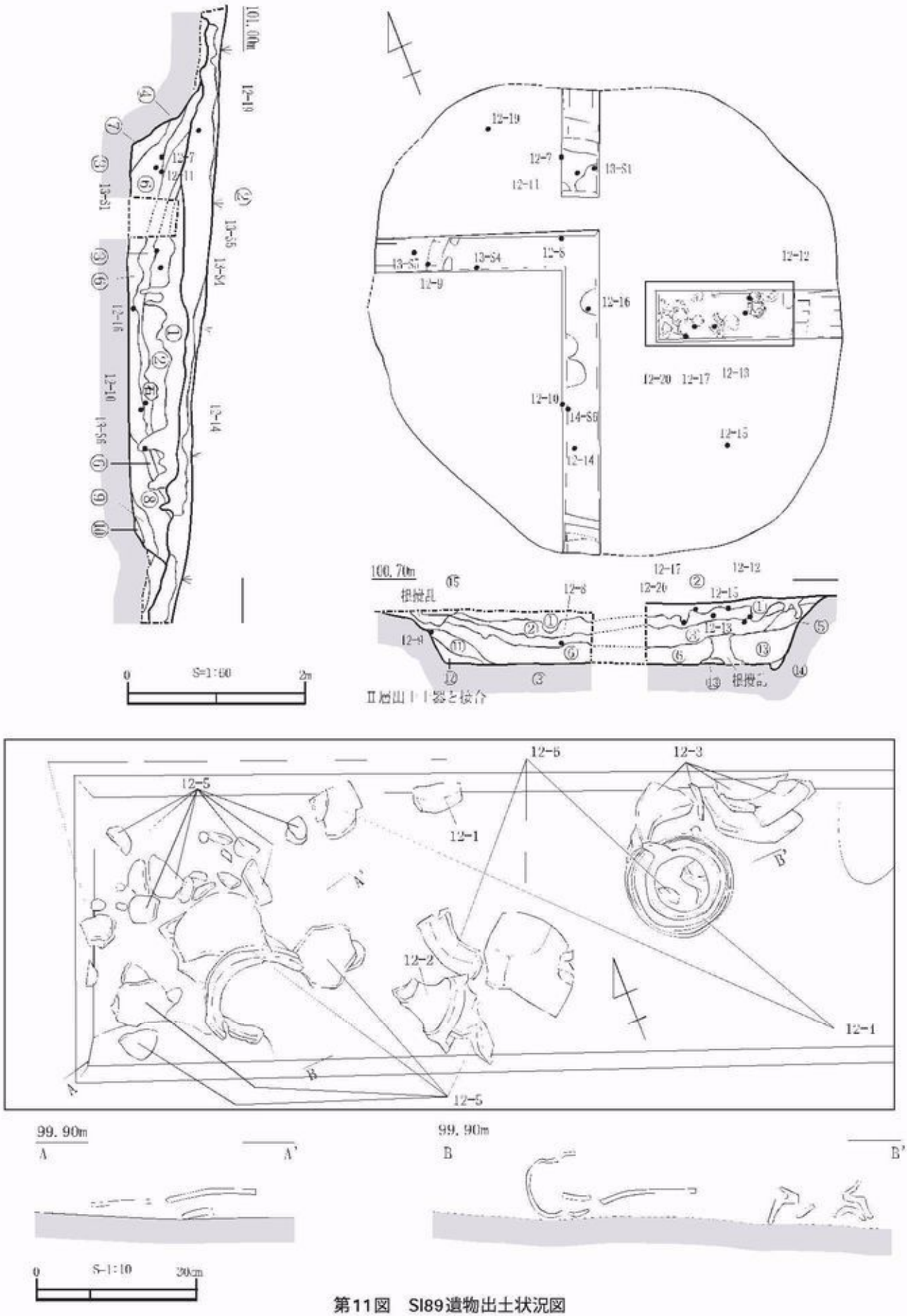
⑬ 褐色土 [7.5YR4/4] 炭粒を含む

⑭ 褐色土 [7.5YR4/4] ⑥層より暗い、周溝埋土

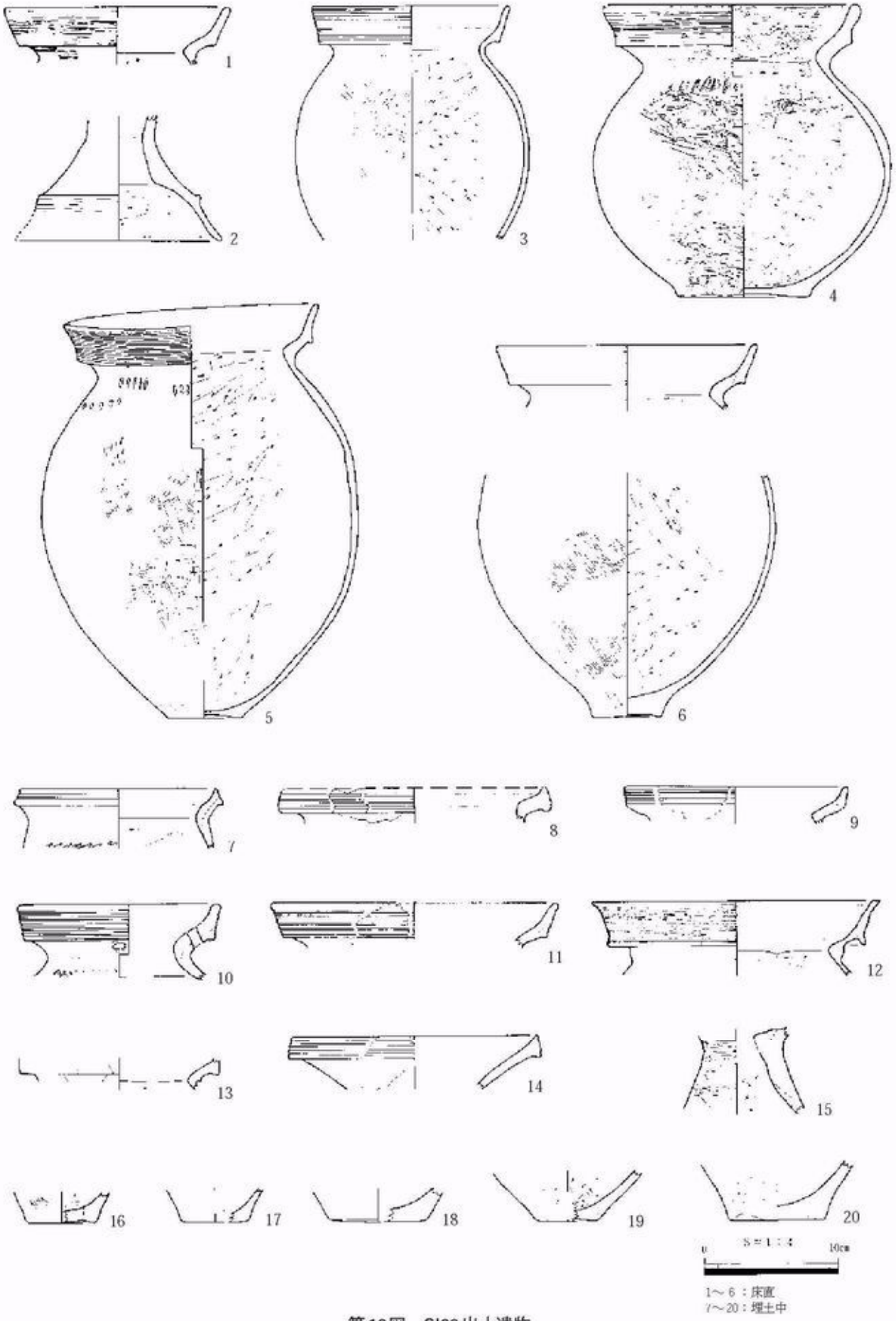
SD83

⑮ 灰褐色土[10YR4/2] 炭粒を含む、Ⅱ層に色調が似る

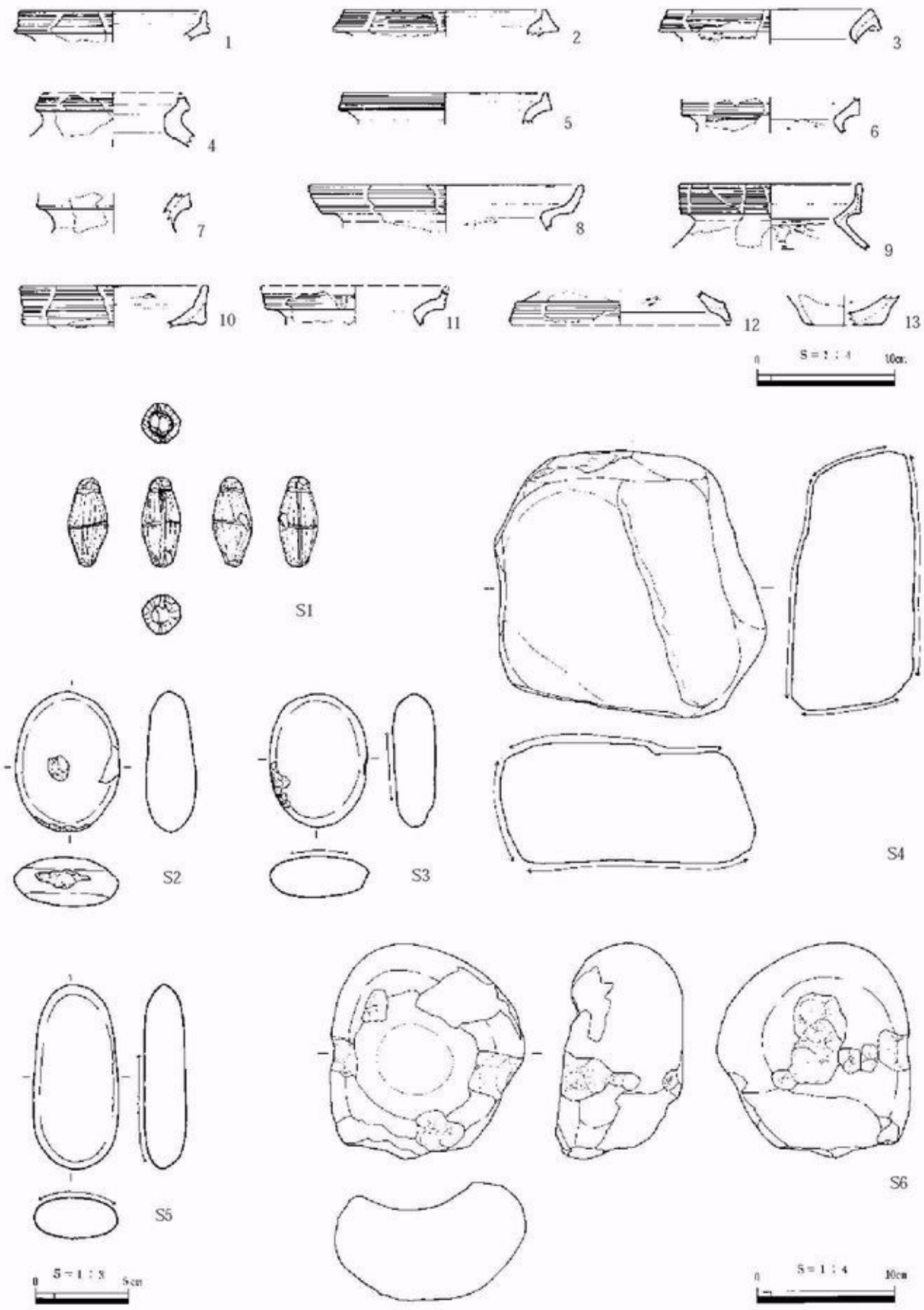
第10図　18MN SI89



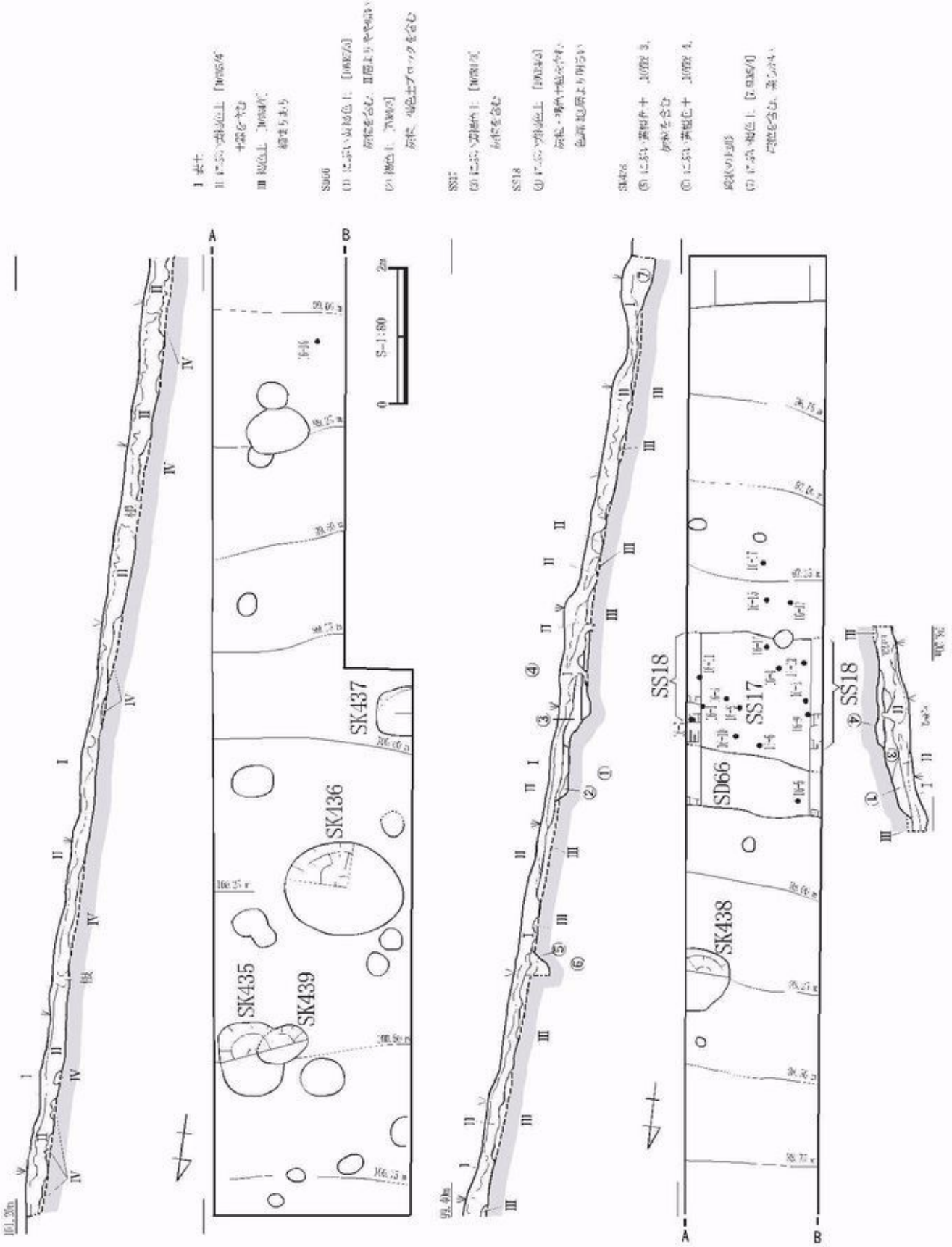
第11図　SI89遺物出土状況図



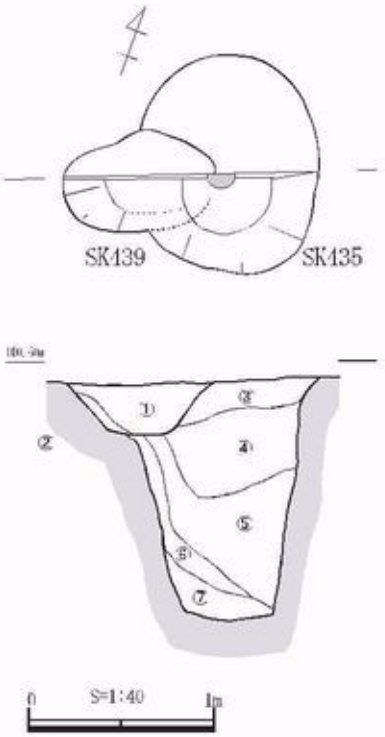
第12図　SI89出土遺物



第13図　18MNトレンチ1出土遺物

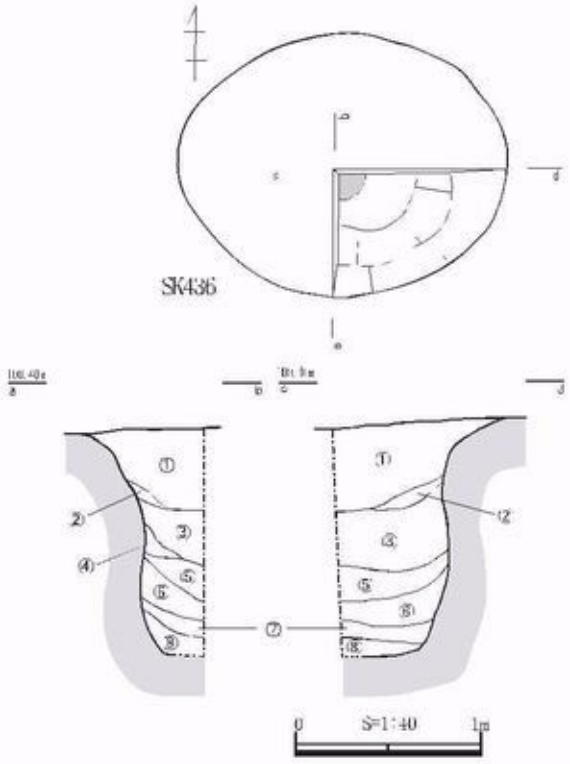


第14図　18MNトレンチ2



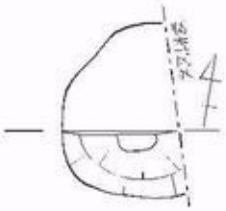
SK435・SK439

① にぶい黄褐色十　[10YR6/4]　→SK439埋十
② 褐色二　[10YR4/6]　→SK435埋上
③ 明黄褐色　[10YR6/6]
④ 黒褐色Ⅰ　[10YR3/6]
⑤ 褐色一　10YR4/4
⑥ 褐色　[10YR4/6]　締まりあり、炭化あり
⑦ 褐色二　10YR4/6　締まりあり、炭化あり
　⑥より色調暗い

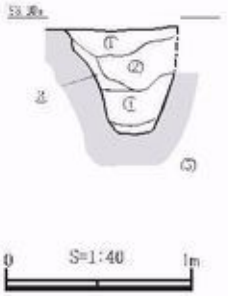


SK436

① にぶい赤褐色二　[10YR5/4]
② 黄褐色十　[10YR5/4]　炭化を含む
③ 褐色上　[10YR4/6]　炭化を含む
④ 黄褐色十　[10YR5/6]
⑤ 褐色上　[10YR4/6]　締まりあり
⑥ 褐色十　[10YR4/4]　締まりあり
⑦ 褐色Ⅰ　[10YR4/4]　締まりあり、⑤・⑥より色調暗い
⑧ 褐色十　[10YR4/6]　締まりあり、炭化あり

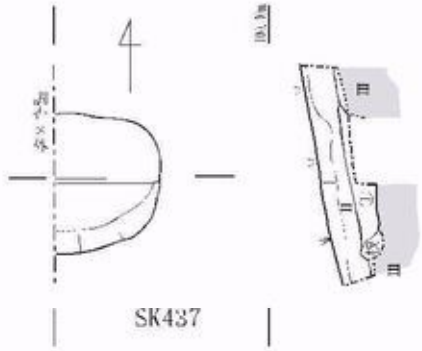


SK438

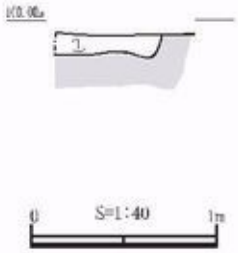


SK438

① にぶい黄褐色上　[10YR5/3]
　炭化を含む
② にぶい黄褐色上　[10YR5/4]
③ 明黄褐色十　[10YR6/6]
④ にぶい黄褐色上　[10YR5/4]
　締まりあり、粘性あり
⑤ にぶい黄褐色Ⅰ　[10YR5/3]
　締まる、粘性あり



SK437



Ⅰ 表土
Ⅱ にぶい黄褐色上　[10YR5/4]
　炭化を含む
Ⅲ 褐色上　[10YR4/6]
　締まりあり

SK437

① にぶい黄褐色上　[10YR4/3]
　炭化、焼土粒を含む

第15図　18MNトレンチ2　落とし穴、土坑

その他、落とし穴、土坑、溝状遺構、ピットを検出した。

（1）層序

表土Ⅰ層の下には、Ⅱ層（にぶい黄褐色土）が堆積している。Ⅱ層は丘陵肩部付近で厚さ約20㎝、緩斜面部で約10㎝堆積し、トレンチ全体に広がっている。

遺構検出面はⅡ層下面である。

（2）遺構

SS17、SS18、SD66

標高97.5ｍにある。南北に断ち割るようにサブトレンチを2本設定した結果、3つの遺構が切り合っていることが分かったため、段状遺構および溝状遺構と称することにした。以下、時期の古い順に特徴を述べる。

段状遺構

SS18（第14図、写真31～33）

北壁際に底の幅16～20㎝、断面U字状の壁溝を伴っている。遺物は出土していない。

SS17（第14図、写真31～33）

SS18を削平してつくられており、検出した範囲は東西2ｍ、南北1.8ｍである。SD66に切られているために明瞭ではないが、東側のトレンチでわずかに立ち上がりが確認できる。調査区外にのびているため、全体形は不明である。埋土中からは、弥生時代後期前葉（Ⅴ－1）の特徴をもつ土器が出土している（第16図－1～4、6～12、写真51）。

溝状遺構

SD66（第14図、写真31～33）

SS17の埋土を掘り込んでおり、検出時の範囲は東西2ｍ、南北80㎝、深さは25㎝である。調査区外にのびているため全体形は不明であるが、断面形から溝状遺構と考えられる。遺物は、埋土上面から弥生時代後期後葉（Ⅴ－3）と思われる土器片が1点出土している（第16図－5、写真51）。

土坑

SK435（第15図、写真34）

標高100.5ｍにある。検出時の平面形は長径1.15ｍ、短径95㎝の円形、深さは1.25ｍである。底部にピットを確認したことから、落とし穴と判断した。遺物は出土していない。

SK436（第15図、写真35）

標高100.2ｍ、SK435とは約1.2ｍ離れた位置にある。検出時の平面形は長径1.75ｍ、短径1.4ｍの円形、深さは1.2ｍである。底部にピットを確認したことから、落とし穴と判断した。遺物は出土していない。

SK437（第15図、写真36）

標高99.9ｍにある。一部がトレンチの壁にかかっているため全体形は不明であるが、検出時の平面形は長径75㎝、短径55㎝、深さは10㎝である。遺物は出土していない。

SK438（第15図、巻頭図版2－3、写真37）

標高98.2ｍにある。一部がトレンチの壁にかかっているため全体形は不明であるが、検出時の平面形は長径95㎝、短径70㎝、深さは55㎝である。底部にピットは確認していないが、形状および埋土の色調から落とし穴と判断した。遺物は出土していない。

SK439（第15図、写真34）

標高100.5ｍに位置し、SK435の埋土を掘り込んでいる。検出時の平面形は長径80㎝、短径55㎝の楕円形で、深さは25㎝である。遺物は出土していない。

その他の遺構

ピット（第14図）

検出したピットの多くは、標高100ｍ以上の範囲に集中しており、斜面下部での密度は低い。埋土の色調は褐色である。検出にとどめたため、時期は不明である。

段状の地形（第14図）

T2の南端部にあり、検出した範囲は東西2ｍ、南北80㎝である。埋土はしまりの弱い土質で、近代の遺物を含んでいる。

（3）遺構外出土の遺物

前述した遺構出土の遺物の他、Ⅰ層から弥生時代後期前葉～後葉（Ⅴ－1～3）の土器片を確認している（第16図－13～17、写真51）。

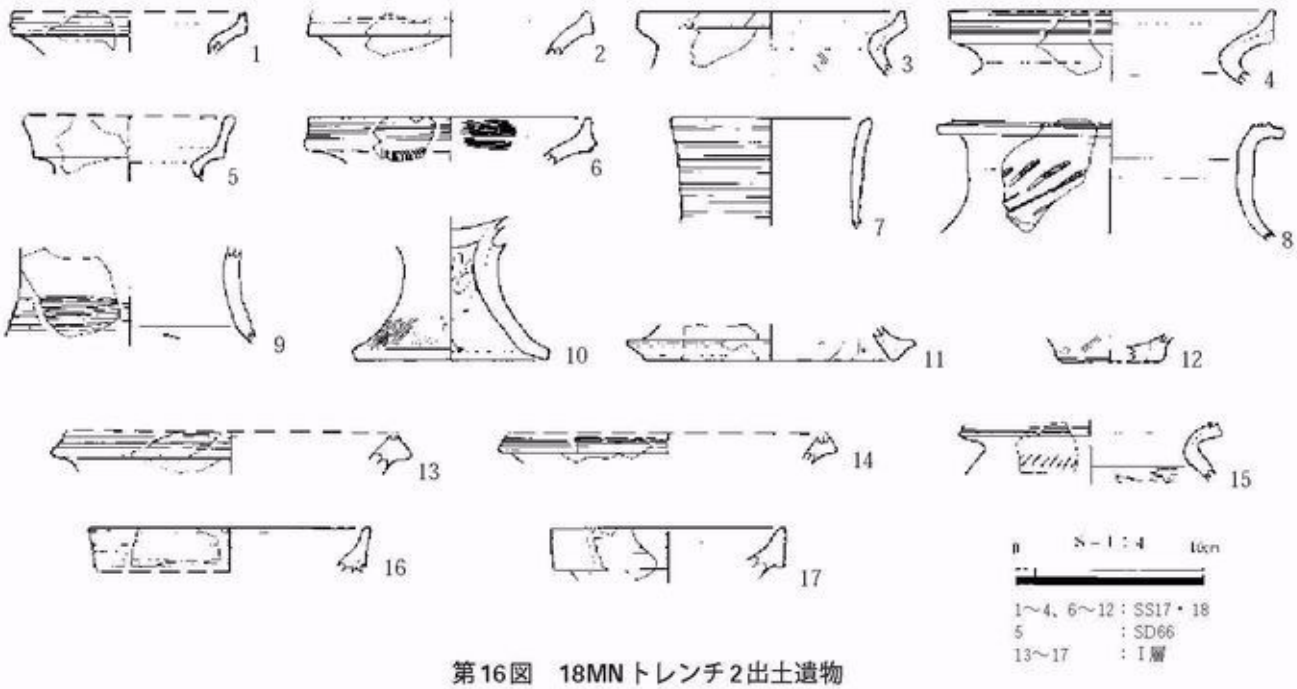
4　T3の調査（第17図、写真38、39）

1S区南端部において、南斜面地の遺構の分布状況を確認するために設定したトレンチである。T2からは東に150ｍの位置にある。トレンチの長さは10ｍ、幅は4ｍに設定した。

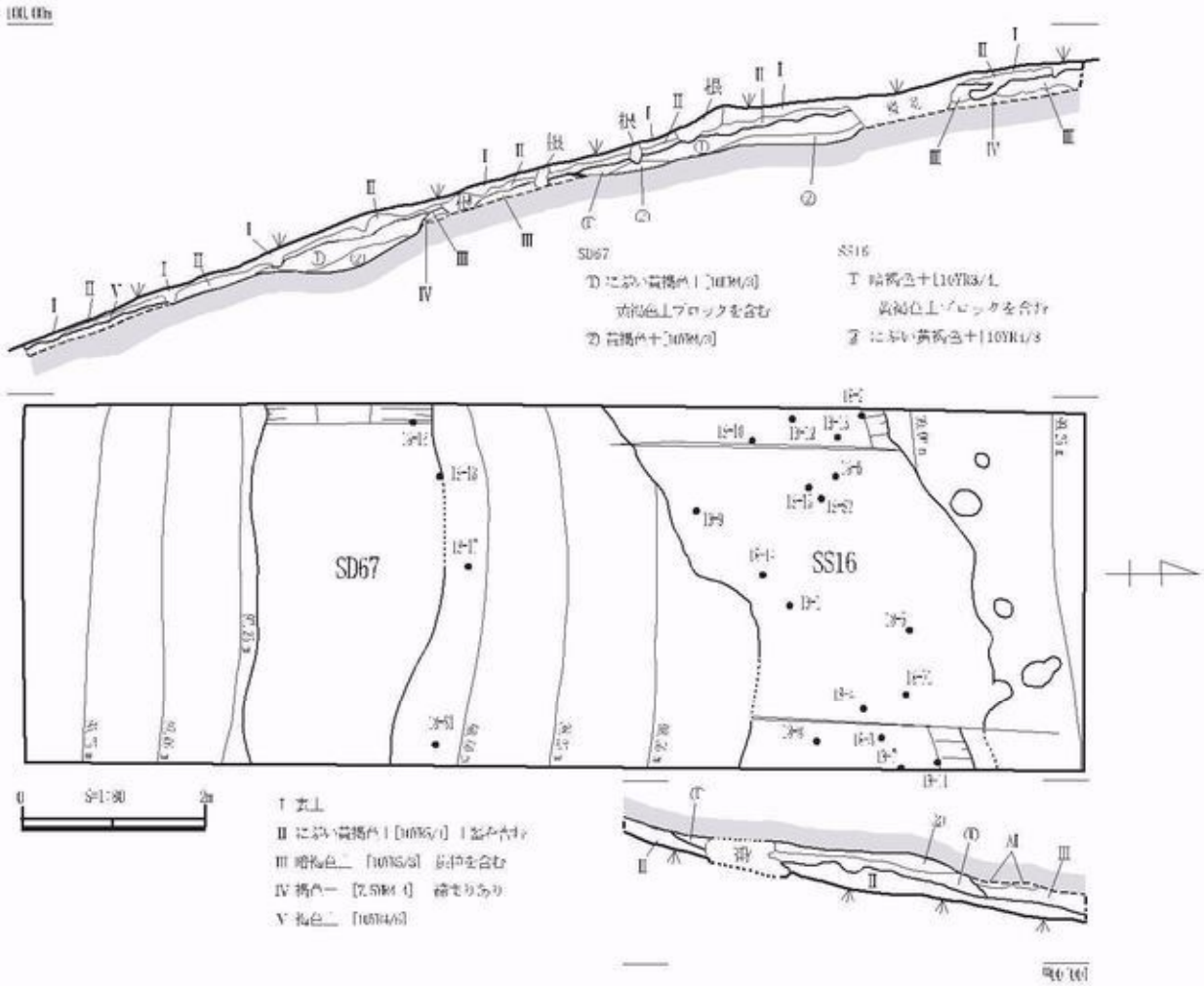
調査の結果、段状遺構、溝状遺構、ピットを検出した。

（1）層序

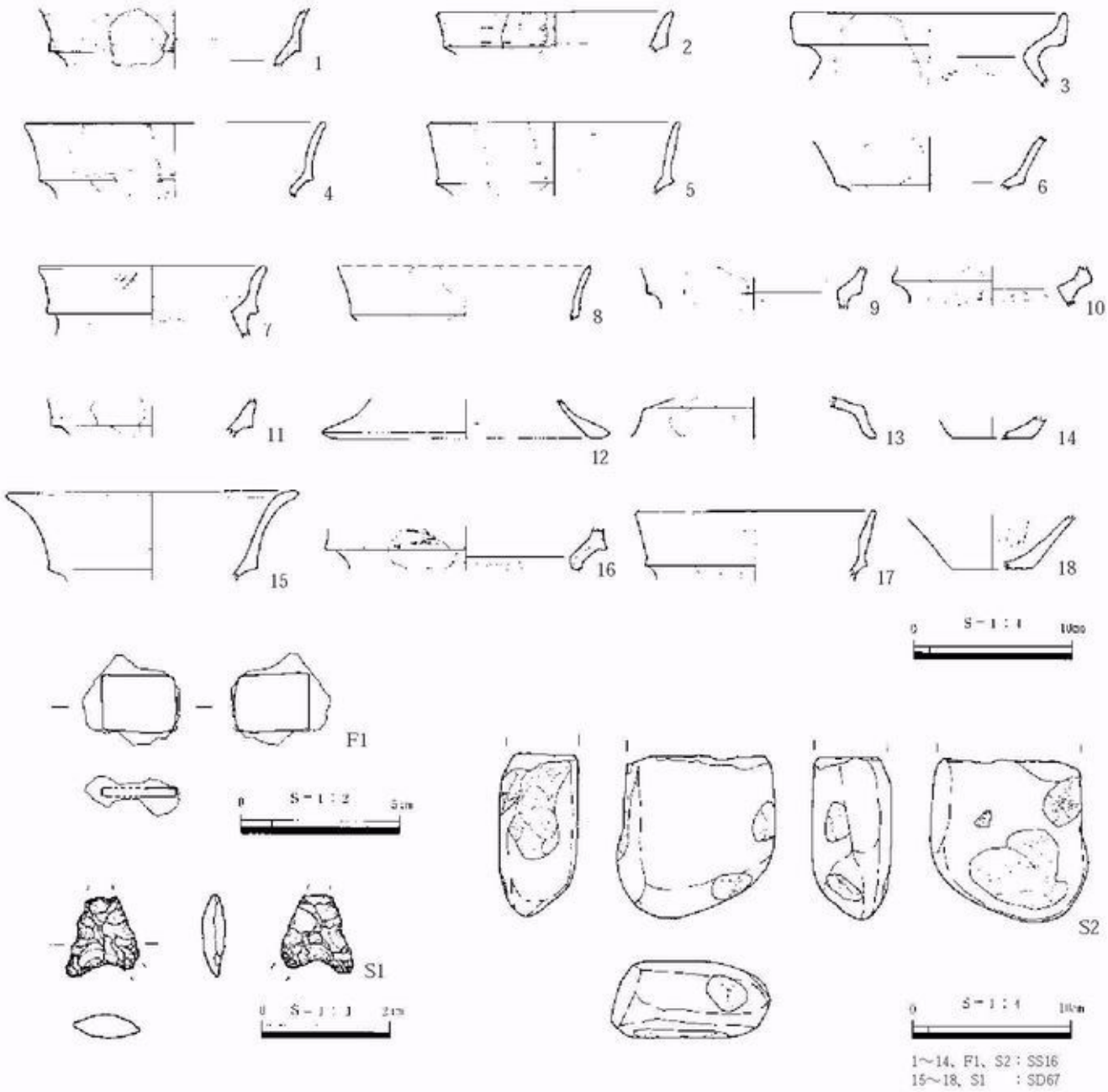
表土Ⅰ層の下には、トレンチ全体にⅡ層（にぶい黄



第16図　18MNトレンチ2出土遺物



第17図　18MNトレンチ3



第18図　18MNトレンチ3出土遺物

褐色土）が広がっている。Ⅱ層には少量の土器が含まれているが、時期を特定できるような特徴をもつものは出土していない。Ⅱ層の下にはⅢ層（暗褐色土）およびⅤ層（褐色土）が堆積している。Ⅲ層は斜面上方にのみ認められる堆積である。Ⅲ層の下にはⅣ層（褐色土）が堆積している。

遺構検出面はⅡ層下面である。

（2）遺構

段状遺構

SS16（第17図、写真40、41）

標高98.7mに位置している。調査区外にのびているため全体形は不明であるが、検出時の平面形は西に向かってやや下がっていることから、収束部に近いことが想定される。検出時の規模は南北3m、深さ最大30cmである。埋土中から弥生時代後期中葉～終末期（Ⅴ－2～Ⅵ－1）の特徴を持つ土器が出土している（第18図－1～15、写真52）。その他、板状鉄器、敲石が各1点出土している（第18図－F1、S2、写真53、56、57）。出土遺物の特徴から、本遺構の廃絶時期は弥生時代終末期（Ⅵ－1）以前と考えられる。

溝状遺構

SD67（第17図、写真42、43）

標高97.5m、SS16から南に最大3m離れた位置にある。調査区外にのびているため全体形は不明であるが、検出

時の規模は南北2m、深さ30cmである。埋土中からは弥生時代後期中葉～終末期（Ⅴ－2～Ⅵ－1）の特徴を持つ土器（第18図－16～18、写真52）、石鏃（第18図－S1、写真54）が出土している。出土遺物の特徴から、本遺構の廃絶時期は弥生時代終末期（Ⅵ－1）以前と考えられる。

その他の遺構

ピット（第17図）

本トレンチで検出したピットは全てSS16よりも北側に位置している。埋土の色調は褐色である。検出にとどめたため、時期は不明である。

5　まとめ

本調査の目的は、1S区南端部および2区南東部を対象とし、丘陵縁辺部の遺構の分布状況を把握することであった。

3本のトレンチを設定した結果、遺構は竪穴住居跡、段状遺構、土坑、溝状遺構、落とし穴、ピットを確認した。また、遺物では弥生時代後期前葉～終末期（Ⅴ－1～Ⅵ－1）の土器、石器、鉄器が出土した。

以下、調査の成果と課題についてまとめておく。

(1) 遺構の分布状況について

第1次発掘調査時の集落遺構の分布をみると、T1周辺では弥生時代後期中葉（Ⅴ－2）のSI38が確認されたのみであった。しかし、T1で新たにSI89およびS1、S2を検出したことにより、2区南緩斜面に集落遺構が広がっていることがわかった。T1のⅡ層およびT2のⅠ層からは弥生時代後期前葉～後葉（Ⅴ－1～3）の土器が出土していることから、本調査区周辺では当該期の遺構が分布している可能性がある。ただし、T2では竪穴住居跡は検出されておらず、T2周辺では竪穴住居跡の分布の密度は低い可能性が考えられる。

また、1S区南部では、第1次発掘調査時に弥生時代後期後葉～終末期（Ⅴ－3～Ⅵ－2）の竪穴住居跡が密に分布していることが明らかにされていたが、T3で丘陵肩部にSS16を確認したことにより、1S区南端の未調査地についても、丘陵縁辺部に集落遺構の広がりが想定される。

(2) 今後の課題について

残された課題として、妻木新山地区では、引き続き今回の調査のように斜面地の利用状況についてデータを蓄積していく必要があると考える。また、湧水地や谷を対象とした調査も今後の課題である。

（長尾かおり）

註

1）2000年度および2004年度報告の分布調査において確認されている。

2）石錘の評価については、坂本嘉和氏にご教示いただいた。また、石器の石材鑑定は赤木三郎氏に依頼した。

参考文献

中原斉 2001「2．分布調査について」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2000』濱田竜彦編 鳥取県教育委員会

岡野雅則他 2005「5．妻木新山地区の分布調査報告－妻木晩田遺跡第8次分布調査－」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2004』岡野雅則編、鳥取県教育委員会

馬路晃祥 2006「第Ⅳ章 妻木山地区出土遺物のまとめ」『史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書－第8・11・13次調査－』馬路晃祥編、鳥取県教育委員会

第5表　土器出土状況類型Ⅲ類の竪穴住居跡

	地区	住居番号	時期	土器の組成（胴部・底部片は除く）
1	妻木山	SI81	Ⅴ－2	壺1、甕1
2	松尾頭	SI15	Ⅴ－3	甕3
3	妻木山	SI176	Ⅴ－3	壺1、甕9
4	松尾頭	SI29b	Ⅵ－1	甕3
5	松尾城	SI02	Ⅵ－2	高坏1、器台2、甑1
6	妻木山	SI172	Ⅵ－2	甕5
7	妻木山	SI39	Ⅵ－2	器台1
8	妻木新山	SI89	Ⅴ－3	壺1、甕4、器台1